

## 編集委員会便り

本誌の編集委員会は、本誌が奇数月に刊行されているのに合わせて偶数月に開催されている。場所はその都度まちまちであるが、大阪科学技術センターや大阪大学工業会館である場合が多い。開催時間は大抵午後3時から5時の2時間である。

会議の前半は事務局からの諸報告に始まり、既刊号や1ヶ月後～3ヶ月後に刊行の号の内容確認や進捗状況報告等が極めて事務的に担々と進められて行く。このあたりではまだ委員の緊張感も少いようである。しかし、議事が進んで7ヶ月～9ヶ月先の号の特集テーマを考える頃になると委員達の緊張も次第に高まってくる。と言うのも、特集に関しては委員が順番に企画を担当することになっているためである。

どなたか奇妙な委員が手回し良く特集の候補を出して下さる場合は大変ハッピーに丸く納まるが、時にはなかなか特集候補が決らず、特集企画担当の白羽の矢が立ってしまうと、かなり気の重い宿題を背負い込むハメになってしまうのである。しかし大抵は、委員の方々の積極的な姿勢と鋭い選択眼が発揮されて毎回立派な特集が企画されて行くのが通常である。

このような2時間が終ると、ビールが出て少し談笑の時間を持った後で散会となる。会議は林委員長のエーモアに富んだ名司会に引っ張られて大変和気藹々とした雰囲気の中で進められる。このためか、委員の出席率も大変高く、東京方面の委員の方も遠方にも拘らず毎回お会いさせて頂いている。筆者も昭和63年の末から委員をさせて頂いているが、やむを得ず欠席したのは1～2度だけと記憶している。

さて、今月号の特集は「エネルギーシステムの計装制御」である。この特集が決ったのは昨年の12月の編集委員会であったかと思う。巨大化、複雑化しつつあ

るエネルギーシステムの頭脳ともいべき計装制御システムの役割はますます重要となっており、ここで種々のエネルギーシステムにおける計装制御技術の特集に取り上げ、一堂に会した形で紹介することは時宜にかなったものであると委員の意見が一致し、筆者が企画担当を仰せ付かった。

計装制御技術はエネルギーの変換、輸送、貯蔵、利用、またエネルギー資源の採掘、加工、再処理、廃棄等のいずれのシステムにおいても大きな役割を果たして来た。プラントシステムの効率向上、安全性・信頼性の確保、保守・点検の合理化・省力化等いずれの側面をとっても計装制御技術抜きには語れない。また、最近では人工知能(AI)を始めとする新しい制御技術やヒューマンファクタエンジニアリングを利用したマンマシンインタフェースの導入等により、プラントの計装制御技術も大きな変貌を遂げようとしている。このような時期に、多様なエネルギーシステムにおける計装制御技術の特集として一望できることは大きな意義があり、読者にとっても益するところが小さくないと信ずる。

執筆陣としては総論を御執筆頂いた京都大学吉川先生始め、いずれも第一線で御活躍中の御多忙を極めておられる方々ばかりであるが、快く執筆を御承諾頂けたことは大変幸せであった。この紙面をお借りして心からお礼申し上げる次第である。

田中 光雄

(三菱電機(株)開発本部開発部参事)